

ウェストミンスター信仰告白 第一章第三節

第4回 外典とは何か

はじめに

今回は第一章第二節を通して、教会が受け継いできた六十六巻の聖書について学びました。私たちは、「正典」とは教会が権威を与えた書物ではなく、神の民が長い歴史の中で受け継いできた神の御言葉であることを確認しました。また、正典形成は一度の会議で決定されたものではなく、神の民の歴史の中で成熟していったことも学びました。今日は、その続きとして第三節を見ていきます。

ここでは「外典」が取り上げられます。外典という言葉は、多くのクリスチャンにとってあまり馴染みがありません。しかし、宗教改革を理解する上でも、また旧約聖書を理解する上でも、大変重要な問題です。第三節は次のように告白しています。

「一般に外典と呼ばれる書物は、神の靈感によらないから、聖書の正典の一部では決してなく、またそれゆえ、神の教会において何の権威もなく、また、人間による他の文書と、どんな仕方でも異なったものとして承認されたり、使用されたりしてはならない。」

この文章だけを読むと、改革派教会は外典をまったく価値のない書物と考えているように感じられるかもしれません。しかし、本当にそうなのでしょうか。今日はまず、「外典」とは何かを歴史的に理解するところから始めたいと思います。

一 「外典」とはどのような書物なのか

まず、「外典」という言葉そのものを整理しておきましょう。実は、この言葉は、教会によって意味が異なります。改革派教会では「外典」と呼ぶ書物を、カトリック教会は「第二正典」と呼びます。この違いは、単なる名称の違いではありません。そこには、これらの書物をどのように評価するかという神学的な違いがあります。一般に外典と呼ばれる書物には、トビト記、ユディト記、知恵の書、シラ書（ベン・シラの知恵）、バルク書、マカバイ記第一・第二、エステル記・ダニエル書への付加部分、などがあります。これらは、旧約聖書と新約聖書の間期、すなわちペルシア時代の終わりからローマ時代初期にかけて成立したと考えられています。したがって、これらはイスラエルの歴史が終わった後ではなく、**第二神殿時代のユダヤ教**の中で生まれた文書です。この点は、とても重要です。

二 「沈黙の四百年」という言葉を見直す

ここで、一つの表現について考えてみたいと思います。昔からプロテスタント教会では、「旧約と新約の間には神が語られなかった四百年がある」という説明がよくなされてきました。いわゆる「沈黙の四百年」という表現です。しかし、この言い方は、今日では慎重に用いる必要があります。確かに、ウェストミンスター信仰告白が告白する意味では、この時代には旧約正典に加えられる新しい啓示は与えられませんでした。しかし、それは**神が歴史の中で何ものもなさらなかった**という意味ではありません。むしろ、この時代はユダヤ教が大きく変化した時代でした。会堂礼拝が発達し、律法研究が盛んになり、パリサイ派やサドカイ派などの諸運動が現れます。また、この時代の出来事が、新約聖書の背景を形づくっています。

外典は、そのような歴史を知るための第一級の史料なのです。ですから、「外典は正典ではない」ということと、「読む価値がない」ということは、決して同じ意味ではありません。

三 宗教改革者はなぜ外典を正典と認めなかったのか

ここで一つの疑問が生じます。外典が第二神殿時代を知るうえで重要な文書であるならば、なぜ宗教改革者たちは、それらを正典として受け入れなかったのでしょうか。この問題を考えるためには、まず十六世紀の宗教改革という歴史的状況を理解する必要があります。宗教改革者たちは、外典そのものを否定したかったわけではありません。彼らが問題としたのは、**教会の教理を形成する根拠として、外典を旧約聖書と同じ権威に置くこと**でした。宗教改革において中心となった問いは「教会は何によって立つのか」という問いでした。その答えとして改革者たちは、「聖書のみ (*Sola Scriptura*)」を掲げました。しかし、この「聖書」とは何を指すのでしょうか。まさにその問いに答えるために、ウェストミンスター信仰告白第一章第二節と第三節が置かれているのです。

四 外典をめぐる教会の歴史

ここで注意しなければならないのは、古代教会が外典について一つの見解を持っていたわけではないということです。例えば、四世紀末にラテン語訳聖書（ウルガタ）を翻訳したヒエロニムスは、ヘブライ語で伝えられてきた書物を旧約正典の基準と考えました。彼は、外典を教会で読むことは認めながらも、教理を確立する根拠とすることには慎重でした。一方、同じ時代の教父であるアウグスティヌスは、教会で広く用いられてきた伝統を重視し、外典をより積極的に受け入れました。つまり、古代教会の中にも、すでに異なる考え方が存在していたのです。このことは、宗教改革が突然新しい考えを生み出したのではなく、古くから続いていた議論を受け継いでいたことを示しています。

五 トリエント公会議と宗教改革

十六世紀になると、この問題は宗教改革の中で改めて大きく取り上げられました。1546 年、トリエント公会議は、外典（第二正典）を正式に旧約聖書の一部として確認しました。これは、宗教改革への応答という文脈の中で理解する必要があります。つまり、「聖書とは何か」という問いが、教会全体の課題となっていたのです。これに対して宗教改革者たちは、外典を歴史的・宗教的価値のある文書として尊重しつつも、旧約正典と同じ権威を認めることはできないと考えました。ウェストミンスター信仰告白第三節は、この宗教改革の立場を受け継いでいます。ここで重要なのは、第三節が「外典を読んではならない」と言っているのではないことです。第三節が問題としているのは、**教会の信仰と教理を形成する権威**です。その意味で、「神の靈感によるものではない」という表現は、外典の文学的価値や歴史的価値を否定するものではなく、**正典としての権威を認めない**という神学的判断を表しています。

六 外典は今日どのような意味を持つのか

現代の旧約学において、外典の価値はますます高く評価されています。それは、旧約聖書と新約聖書を結ぶ約四百年の歴史を知るうえで欠かすことのできない資料だからです。例えば、『シラ書』からは当時の知恵文学の発展を知ることができます。『マカバイ記第一』と『マカバイ記第二』は、セレウコス朝による宗教政策に対するユダヤ人の抵抗運動を伝える第一級の歴史資料です。また、『知恵の書』には、後の新約聖書にも通じる思想的背景を見るこ

とができます。新約聖書を読むとき、イエスやパウロが生きた時代のユダヤ教を理解することは欠かせません。その意味で、外典は正典ではありませんが、**歴史資料として極めて重要な文書**です。したがって、改革派教会が外典を正典と区別することと、外典の研究価値を認めることは矛盾しません。むしろ、両者を区別することによって、それぞれの位置づけがより明確になると言えるでしょう。

まとめ——ウェストミンスター信仰告白は何を告白しているのか

ここまで、ウェストミンスター信仰告白第一章第三節を通して、外典について学んできました。私たちはまず、外典が第二神殿時代に成立した重要なユダヤ教文書であり、新約聖書の背景を理解するために欠かすことのできない歴史資料であることを確認しました。また、古代教会においても、その評価は一樣ではなく、宗教改革に至るまでさまざまな議論が続けられてきたことも見てきました。そのような歴史を踏まえたうえで、ウェストミンスター信仰告白は、外典を「神の靈感によるものではないので、正典の一部ではない」と告白しています。この告白は、外典の歴史的価値や宗教的価値を否定するものではありません。問題となっているのは、**教会は何を神の言葉として聞くのか**という点です。教会は、多くの優れた宗教文書を持っています。歴史を学ぶための文書があります。信仰を励ますための文書があります。神学を深めるための文書があります。しかし、その中で、教会が礼拝において神の言葉として朗読し、説教の基礎とし、信仰と生活の最終的な規範とするのは、正典として受け継がれてきた聖書です。ウェストミンスター信仰告白が守ろうとしているのは、この区別です。外典を軽んじるためではなく、正典の固有の権威を明らかにするために、第三節は置かれているのです。その意味で、第三節は第二節の続きであるだけでなく、第一章全体への橋渡しともなっています。第一章第四節では、さらに一步進んで、「**では、その聖書は、なぜ神の言葉として権威を持つのか**」という問いが取り上げられます。それは、外典との違いを論じるだけでは答えることのできない、より根本的な問いです。聖書の権威は、教会が与えたものではありません。国家が保証したものでもありません。学者が証明したからでもありません。では、その権威はどこから来るのでしょうか。ウェストミンスター信仰告白は、その問いに真正面から答えようとしています。

第四節 聖書の権威について

ここまで第一章第三節を通して「外典」について学びました。外典が第二神殿時代を理解するための重要な歴史資料であること、しかし教会はそれらを正典とは区別してきたことを確認しました。すると、当然一つの疑問が生まれます。「**では、正典と外典を分ける決定的な違いは何なのか**」あるいは「**聖書は、なぜ神の言葉として権威を持つのか**」。これが、第四節のテーマです。

一 第四節は何を告白しているのか

第四節には、次のように記されています。

「聖書が信じられ、従われるべき、その根拠となる聖書の権威は、いかなる人間あるいは教会の証言にも依拠せず、その著者である神（神は真理そのものである）に全く依拠している。そしてそれゆえ、聖書はそれが神の言葉であるという理由で受け入れられねばならない。」

この文章は、宗教改革の神学を最もよく表している一節の一つと言ってよいでしょう。ここで信仰告白が語っていることは、非常に明快です。聖書が権威を持つ理由は、**教会が権威を与えたからではない**、ということです。また、**長い歴史の中で尊敬されてきたからでもない**。さらに、**学問によって証明されたからでもない**。そうではなく、**神がその著者であるから**。これが第四節の結論です。

二 宗教改革で問われた「権威」の問題

ここで、十六世紀の宗教改革を少し振り返ってみましょう。宗教改革は、単なる教会改革運動ではありませんでした。その根底には、「**教会の最終的な権威はどこにあるのか**」という問いがありました。中世教会では、聖書はもちろん大切にされていました。しかし同時に、教会の伝統、公会議、教皇の教えなども重要な権威と考えられていました。宗教改革者たちは、それらすべてを否定したわけではありません。歴代の教会の歩みを深く尊敬していました。しかし彼らは、「**最終的に教会を裁くことのできる権威は何か**」と問われたとき、「**それは聖書である**」と答えたのです。ここで大切なのは、「聖書だけあれば教会は不要だ」と主張したのではない、ということです。教会は聖書を読み、説教し、信仰を継承する共同体として不可欠です。しかし、その教会自身もまた、聖書によって吟味され続ける存在なのです。この点に、宗教改革の核心があります。

三 教会の権威と聖書の権威

ここで誤解しないようにしたいことがあります。改革派教会は、教会の権威を否定しているのでしょうか。決してそうではありません。教会には、神から委ねられた大切な務めがあります。福音を宣べ伝えること。洗礼と聖餐を執り行うこと。信徒を牧会すること。信仰を教えること。これらはすべて、教会に委ねられた重要な働きです。しかし、その働きは、教会が独自の権威を持っているという意味ではありません。教会は、神の言葉に仕えるために召された共同体です。改革派神学では、しばしば次のように表現されます。**教会は聖書の主人ではなく、その奉仕者である**。これは、教会の働きを軽んじる言葉ではありません。むしろ、教会の務めがどれほど尊いものであるかを示しています。教会は、自分自身を語るのではなく、神が語られた言葉を忠実に取り次ぐために存在しているのです。

四 私たちは、なぜ聖書を神の言葉と信じるのか

ここで、一つの大切な問いが生まれます。第四節は、「聖書は神がその著者であるから権威を持つ」と告白しています。しかし、私たちはどのようにして、それを知るのでしょうか。聖書には、「これは神の言葉です」と書いてあります。しかし、「聖書がそう言っているから信じる」というだけでは、信仰を持たない人に対して十分な説明にはならないでしょう。この問いは、古代教会以来、繰り返し議論されてきました。そして、宗教改革者たちもまた、この問題に真剣に向き合いました。

五 教会の証言は不要なのか

第四節は、「聖書の権威はいかなる人間や教会の証言にも依存しない」と語っています。この文章だけを読むと、「それでは教会の役割は必要ないのではないか」と思われるかもしれません。しかし、そのようには理解できません。例えば、私たちが幼い頃を思い出してみよう。多くの人は、家庭や教会学校、あるいは礼拝の中で聖書に出会いました。牧師や教

師が聖書を教え、両親が聖書を読んでくれました。つまり、私たちは教会の証言を通して聖書を受け取っています。宗教改革者も、この事実を否定してはいません。むしろ、教会の証言には大きな価値があることを認めています。教会は二千年にわたって聖書を読み、写し、翻訳し、説教し、次の世代へ伝えてきました。その働きがなければ、私たちは今日、聖書を手にすることもできなかったでしょう。ですから、第四節は教会の証言を軽んじているのではありません。問題にしているのは、「権威の根拠」です。教会は聖書を証言します。しかし、教会が証言したから聖書が神の言葉になるのではありません。教会は、すでに神の言葉である聖書を証言しているのです。この順序が、宗教改革において非常に重要でした。

六 歴史研究は聖書の権威を証明できるのか

現代に生きる私たちは、さらに別の問いを持っています。考古学や歴史学、本文批評などの研究が進んでいます。それらの学問によって、「聖書が神の言葉であること」は証明できるのでしょうか。ここでは慎重に考える必要があります。歴史研究は、非常に大切です。例えば、写本の比較によって聖書本文の伝承を明らかにすることができます。考古学は、古代イスラエルや初代教会の歴史的背景を豊かに教えてくれます。また、古代近東の文献との比較によって、聖書の世界がより具体的に理解できるようになりました。このような研究は、聖書理解に大きく貢献しています。しかし、それでも歴史学が扱うことのできるのは、「何が起こったのか」という歴史的事実です。一方、「神が語られた」という告白は、歴史学だけで証明することはできません。なぜなら、それは神学の問いだからです。ここで歴史学を軽視する必要はありません。また、信仰と学問を対立させる必要もありません。むしろ、それぞれが異なる問いに答えていることを理解することが大切です。歴史研究は、神が働かれた歴史をより深く理解する助けとなります。しかし、「神が語られた」ということは、歴史研究だけでは完結しません。そこには、信仰の応答が求められます。

七 第五節への橋渡し

そこで、ウェストミンスター信仰告白は次の第五節へ進みます。第四節では、**聖書の権威の根拠は神ご自身にある**ことが語られました。しかし第五節では、さらに一步踏み込んで、**私たちはどのようにして、その神の権威を確信するのか**という問いが扱われます。そこでは、「聖霊の内なる証し」という改革派神学にとって非常に重要な主題が語られます。第四節と第五節は、別々の話題ではありません。第四節は**権威の根拠**について語り、第五節はその**権威を人が受け入れる過程**について語っています。この二つを区別することによって、ウェストミンスター信仰告白は、「神が語られた」という客観的事実と、「私たちがそれを信じる」という主観的経験とを混同しないようにしています。この点は、改革派神学の聖書論を理解するうえで極めて重要な点です。

第五節 聖霊は聖書の権威をどのように証しされるのか

第四節を通して、聖書の権威は教会に由来するものではなく、その著者である神ご自身に由来することを学びました。しかし、そこで一つの問いが残されました。もし聖書の権威が神に由来するのであれば、**私たちはどのようにして、そのことを確信するのでしょうか**。第五節は、その問いに答えています。まず読んでみましょう。

「われわれは教会の証言によって、聖書に対して高い、畏敬の思いを持つように動かされ、導かれることがある。さらに、その内容の天来の性質、教理の有効さ、文体の威厳、すべて

の部分の一致、全体の目指す目標（それはすべての栄光を神に帰することである）、人間の救いの唯一の道の十分な明示、その他多くの比類のない優秀さ、そしてその全くの完全さは、聖書が自らを神の言葉であるとじっさい十二分に立証する証拠である。しかし、それにもかかわらず、聖書の誤ることのない真理性と神からの権威とについてわれわれが十分に納得し確信するのは、御言葉により、御言葉と共に、われわれの心の中で証言される聖霊の内的御業によるのである。」

これは一文が非常に長いのですが、内容は大きく二つに分けることができます。第一に、**聖書には、それが神の言葉であることを示す多くのしるしがある**。第二に、しかし、**最終的な確信は聖霊によって与えられる**。今日は、この二点を順に考えていきます。

一 教会の証言は大きな助けとなる

第五節は、興味深い言葉から始まります。「教会の証言によって聖書を高く尊び敬うよう導かれる」。ここで第四節を思い出してください。第四節では、**聖書の権威は教会に依存しない**と語られていました。ところが第五節では、**教会の証言は私たちを導く**と言われています。一見すると矛盾しているように見えます。しかし、ここには矛盾はありません。第四節が語っていたのは、**権威の根拠**でした。第五節が語るのは、**私たちが聖書へ導かれる過程**です。例えば、小さな子どもは、母親から「これは聖書ですよ」と教えられます。教会学校でも牧師から聖書を教えられます。そうして私たちは聖書を手に取るようになります。この意味で、教会の証言は非常に重要です。ウェストミンスター信仰告白は、この働きを決して軽視していません。

二 聖書そのものが語る力

第五節は続いて、聖書そのものが持つ特徴を列挙します。内容の天的性質。教えの力。書物全体の統一。神の栄光を目的としていること。救いの道を十分に示していること。これらは、**聖書自身が持っている特徴**です。改革派神学では、これらをしばしば**聖書の自己証明性**と呼びます。つまり、聖書は外から権威を与えられる書物ではなく、その内容そのものが神の言葉であることを語っている、ということです。もっとも、ここで注意が必要です。これらは「数学の証明」のように神の存在や聖書の靈感を論証するものではありません。むしろ、聖書に真摯に耳を傾ける人に対して、その固有の性格を示す「しるし」と言うべきでしょう。カルヴァンも『キリスト教綱要』で、聖書にはそれ自体に威厳が備わっていると述べています。しかし彼は、その威厳を最終的に理解させるのは人間の知性ではなく、神ご自身であると考えました。

三 「聖霊の内なる証し」とは何でしょうか

第五節は最後に、このように告白しています。「……聖書の誤ることのない真理性と神からの権威とについてわれわれが十分に納得し確信するのは、御言葉により、御言葉と共に、われわれの心の中で証言される聖霊の内的御業によるのである」。これが有名な「**聖霊の内なる証し**」です。しかし、この言葉を聞くと、「心の中で神の声が聞こえることですか」あるいは、「何か特別な宗教体験のことでしょうか」と考える方がおられるかもしれません。カルヴァンやウェストミンスター神学が語っているのは、そのような意味ではありません。ここで語られているのは、**聖霊が聖書を通して働かれる**ということです。第五節をよく見ると、「み言葉によって、またみ言葉とともに」とあります。つまり、聖霊は聖書から離れて新し

い啓示を与えるのではありません。聖書を読む者の心を開き、その聖書が神の言葉であることを悟らせてくださるのです。この順序は非常に大切です。改革派神学では、聖霊と聖書は決して切り離されません。聖霊は、ご自身が靈感を与えられた聖書を通して、今日も教会に語り続けられるのです。

四 カルヴァンはどのように説明したのか

カルヴァンは『キリスト教綱要』第一巻第七章で、この問題を詳しく論じています。彼は、教会の証言にも価値があることを認めています。また、聖書の内容の崇高さや、その教えの一貫性も高く評価しています。しかし、それだけでは、人は最終的な確信に至らないと言います。なぜでしょうか。それは、人間の知性には限界があるからです。どれほど多くの証拠を積み重ねても、人間はなお疑い続けることができます。聖書を文学として賞賛することはできても、「これは神が語られた言葉である」と信じることは、知的な判断だけでは到達できません。そこでカルヴァンは、「聖霊の証し」を語ります。彼は有名な比喻を用いています。太陽が輝いていても、目が開かれていなければその光を見ることはできません。同じように、聖書はそれ自体に神の栄光を現しています。しかし、その栄光を見ることができるのは、聖霊によって目が開かれるからなのです。この比喻は、「聖霊が新しい情報を与える」ということではありません。すでに与えられている神の言葉を、神の言葉として受け止めるようにしてくださるということです。

五 信仰と理性は対立するのか

ここで、現代の私たちが抱きやすい疑問にも触れておきたいと思います。「聖霊の内なる証し」と聞くと、「それでは理性や学問は必要ないのでしょうか」という疑問が生じます。しかし、そのようには考えられません。改革派教会は、学問を大切にしてきた伝統を持っています。聖書の原語を学び、歴史を調べ、写本を比較し、考古学の成果に耳を傾けることは、神が与えてくださった知性を用いる営みです。ですから、信仰と学問は対立しません。けれども、学問だけでは答えられない問いがあります。たとえば、「イエスはナザレで活動した歴史上の人物であった」ということは、歴史学も論じることができます。しかし、「イエスは私たちの救い主である」という告白は、歴史学だけでは導き出せません。それは信仰の告白です。同じように、「聖書は古代イスラエルと初代教会の文書である」ということは学問が明らかにできます。しかし、「この聖書は神が教会に語られる言葉である」ということは、聖霊の働きによって受け入れられる真理です。ここで、理性は退けられるのではありません。理性は信仰に仕えるものとして生かされます。そして信仰は、理性を否定するのではなく、その限界を認めながら、神の啓示に聞き従います。

六 第五節が教えていること

第五節は、信仰と学問、教会と聖書、客観と主観を対立させてはいません。むしろ、それぞれを正しい位置に置いています。教会は聖書を証言します。学問は聖書を研究します。歴史学は聖書の背景を明らかにします。しかし、それらはすべて、私たちを聖書へと導く働きです。そして最後に、聖霊ご自身が、聖書を神の言葉として受け入れる確信を与えてくださいます。これが、ウェストミンスター信仰告白第一章第五節の中心的なメッセージです。

次回への橋渡し

ここまで学んでくると、さらに一つの問いが生まれます。もし**聖書が神の言葉であるならば、その中には救いに必要なことがすべて語られているのでしょうか。**この問いに答えるのが第一章第六節です。第六節では、改革派神学のもう一つの重要な原理である「**聖書の十分性**」が語られます。ここでは「**聖書のみ (Sola Scriptura)**」の本来の意味も改めて考えることになります。現代ではしばしば誤解されるこの原理を、ウェストミンスター信仰告白に即して丁寧に学んでまいりましょう。